

生態系に脅威をもたらす ニホンジカの急増

岸元 良輔・尾関 雅章（自然環境部）

なぜ増えるニホンジカ？

近年、ニホンジカが激増して農林業被害だけでなく、生物多様性への影響まで懸念されるようになりました。

なぜシカがこんなに増えたのでしょうか？ じつは、江戸時代まではオオカミや人間が天敵になり数のバランスがとれていたようですが、明治になると銃器の性能が向上し、輸出や軍部の利用で毛皮の需要が急増したために、乱獲で数が激減したようです。しかし、明治末にオオカミが絶滅し、戦後は肉や毛皮の需要がなくなり、シカの天敵がいなくなりました。さらに、昭和30年代は拡大造林による皆伐で、伐採地の下草が育って一時的にシカの餌量が増大しました。中山間地では過疎化が進み、農地や薪炭林として利用されてきた里山が放置されて、シカに限らず野生動物が生活できる環境が広がっています。地球温暖化による少雪は、シカの生存率を上げているかもしれません。シカの問題は、オオカミの絶滅や皆伐など人の手が加わった第1の危機、里山の放置など人の手が入らなくなった第2の危機から派生していると考えられます。



高山帯に現れたシカのメス

シカによる野生植物への影響

こうしたシカの増加にともない、県内では各所で野生植物への摂食圧の増加が目立つようになりました。たとえば、中信高原の鉢伏山ではニッコウキスゲがシカの摂食によって絶滅に近い状態になり、近接する霧ヶ峰でもニッコウキスゲの花芽の被食率が80～90%に達する群生地もあります。さらに、こうしたシカの影響は、かつては予想もされていなかった高山帯にまでおよんでおり、南アルプスの高山帯ではお花畑が大きくその姿を変貌させているほか、八ヶ岳の高山帯でも希少な高山植物



シカの踏み跡が縦横に走る南アルプスの亜高山帯

のシカによる被食が報告されています。

また、絶滅危惧植物のタデスマレについて、その繁殖状況へのシカの影響を調査したところ、まだ周辺植生の顕著な変化は生じていないものの、すでにタデスマレ個体の摂食は生じており、とくに開花・結実の可能性が高い大型の個体がより多く摂食される傾向がありました。そのために、種子生産量と翌年以降の実生発生数が低下しており、その影響は、すでに将来的な集団の縮小をもたらすおそれが高いことが明らかとなっています。



シカに摂食されたタデスマレ

長野県版のレッドデータブックが作成された2000年ごろには、まだこうした影響はあまり考慮されていませんでした。また、2007年に改訂された環境省版のレッドリストでも、シカの影響が顕著となってきたのは屋久島の他西日本を中心とした地域となっています。しかし、シカの急激な増加と分布拡大による絶滅危惧植物への影響は、長野県でも今後より一層顕在化してくるものと考えられます。